

- わたしの提言
- わたしの講義
- 研究室だより
- 学内トピックス
- 前号を読んで

EF

入学者選抜について

白川友紀

システム情報工学研究科教授 アドミッションセンター長

はじめに

本稿では、入試や教育に関してアドミッションセンター(AC)での議論や入試の研究会で伺ったこと、高校の先生方から伺ったことから、本学の入試への提案を紹介します。すなわち「私の提言」と言っても、実は「私の受け売り」が多いことをまずおことわり致します。

さて、本学はいわゆるメジャーな大学ではありませんし、受験産業の言う難関大学にも入っていません。スポーツ界での活躍や教育界での実績などと先進的な制度によって、個性的な大学として評価されていると思います。筑波大に行きたい!という受験生はそれほど多くはないけれども周囲の生徒とはちょっと違う熱心なファン、ちょうど関東地方における阪神タイガースファンのようなところがあるのではないのでしょうか。

このような本学の有り様を考えながら、

推薦入学、個別学力検査(前、後期日程)、AC入試などと入試業務のスリム化について述べさせていただきます。

推薦入学

建学以来、入学定員の約30%を推薦入学で募集しています。推薦入学は、ペーパーテストで測られるいわゆる「学力」だけではなく「人物評価」によって選抜を行うために導入されました。ペーパーテストや短時間の面接で人物評価はできないので、少なくとも2年半以上生徒を見てきた高校教諭の推薦によって選抜を行っています。したがって、高校卒業見込みの生徒だけが志願できる特別選抜となっています。

本学の建学当時は、むしろ、おそらく東京教育大学ご出身の高校の先生方が、上野から常磐線とバスで2~4時間ほどの、ほぼ何もない所にできる大学を、そのような所ででも1人で生きていけるようなしっかり

した生徒を選んで、

「新構想のすばらしい大学だよ」

と逆推薦して下さったのでしょう。

爾来、推薦入学の学生は、真面目で成績も良く、礼儀正しい筑波大学の学生像の形成に大きな影響を与えてきたと思われます。推薦要件を評定平均のA段階としていることにより高校でトップクラスの高い学習習慣を持つ生徒が来ます。彼らは日常習慣的に成績が良かった生徒なので、大学入学後も良い成績をとろうとします。

小論文や面接の工夫も重要ですが、それ以前に望ましい受験生を推薦してもらわないと始まりませんから、アドミッションポリシーを明確に示すことがより重要です。

一方、高校からはいろいろな推薦枠創造の提案があります。専門高校、総合高校、総合学科の枠など高校の種類による枠や、指定校推薦枠のような個別高校の枠、地域枠などを作ろうという提案もあります。しかし、一方に世間では推薦入学は裏口入学の隣の入口というような見方もあることを考えると、いろいろな枠や例外を作ることには慎重でないといけなと思います。

個別学力検査（前期日程）

前期日程では、多くの学類が大学入試センター試験（センター試験）と筆記試験による個別学力検査の点数の加重和で高得点

の者から順に合格者としています。

この加重和の取り方は、いわゆる難関大学と呼ばれる大学ではセンター試験の割合が小さくなっています。個別学力検査の比重が大きく、論理的思考力を見る問題、たとえば加法定理の導出などを出題している大学は、そのような能力のある学生を採りたいというアドミッションポリシーであると考えられます。

個別学力検査の比重が大きい入試であっても、試験問題が公式に数値を当てはめて答を計算するような問題であれば、それは論理的な能力を見ているというより、センター試験とは多少範囲が異なるが、知識や訓練の完成度を見る試験であると考えられます。そのような場合は、センター試験と個別学力検査の直交性が低くなり、全体として狭い能力を見ることになってしまうことに注意が必要です。

大学の外部評価でも、教育目標が「論理的思考力の育成」でそれを実現するための科目が「解析学」となっているのに、試験問題には微積分の計算問題——公式に当てはめれば答が出るような——が並んでいて不審に思うことがままあります。数学さえやっていれば論理的、というような「公式」でもあるのでしょうか。

本学では、現在、多くの学類がセンター試験と2次の個別学力検査にほぼ同じ重み

をおいていますが、この数年、合格者のセンター試験の平均点が上昇し、個別学力検査の平均点が下降しています*。これはセンター試験対策によって本学に合格する者が増えているためと考えられます。考える学生を採るためには、センター試験の比重を下げて個別学力検査に論理的思考力を見るような出題をすることが必要でしょう。2005年度までセンター試験：個別比が10:9であった工学システム学類がいわゆる「ゆとり世代」を迎える2006年度入試では逆に4:6と個別重視に変更しています。理工系では以前から生物学類が個別重視型の配点をしています。

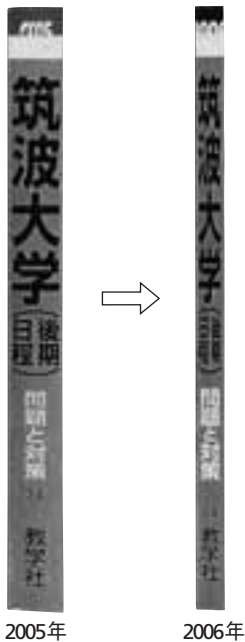
ただし個別学力検査の2時間の試験1科目に与えられる配点には限度があるでしょう。実技や面接も同様ですが、あるひとつの科目への配点を大きくすることは強いアドミッションポリシーの表明となり、その分野は得意だが他の分野は不得手な受験生を集めることになるでしょう。したがって、個別学力検査の配点をあげるためには同時に科目数も増やすことが肝要といえます。科目数を増やすといわゆる偏差値や2次ランクの数値は下がりますが、科目数や科目が異なれば単なる数値の比較には意味がない事を認識しておく必要があります。

筆記試験は、入試(手続、出題、実施、採点)ミスが取り沙汰される試験でもありま

す。公正性、公平性が厳しく問われるため、明確な合格判定処理が求められます。また、高校では早い段階から受験分野や大学を決めることが多くなっているため、科目数の増加など、受験予定が狂うようなことは十分に早い時期に予告をすることにしています。

個別学力検査(後期日程)

一般に「求める人材像」は後期日程に表れるといわれます。前期日程ではアドミッションポリシーが受験科目の組み合わせにより表明されていると考えられます。それに対して後期日程では学類毎に異なった試験を行うので、学類の性格などが表れると



言われています。

本学の「赤本」2006年度版は2005年度版よりずっとスリムになりました。並べてみると大関が小結になったような気がします。後期日程を実施する学群・学類が大幅に減ったためです。

後期日程では面接を行っている学類が多いのですが、面接だけで有効な選抜を行うことが難しいのではないかと考えます。そのため、受験生が「総合的な学習の時間」などで行った研究のプレゼンテーションができるようにすることを提案しています。2003年から高等学校で「情報」とともに「総合的な学習の時間」が必修となり、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動が行われています。この中でプレゼンテーションの練習もしているので、そのような力を見ようということです。総合高校だけでなく、スーパーサイエンスハイスクールや、課外活動で研究などを行って成果を上げている普通高校の先生からも、そのような入試実施への期待があります。

AC入試

AC入試(アドミッションセンター入試)は、ACが教育組織から入学定員の一部を預かって行う入試であることからAC入試と呼んでいます。多くの他大学ではAO入

試と呼んでいます。AC入試は、これまで「問題発見解決能力」を重視する学習指導要領に先導的に対応してきました。今後も中等教育の展開をみながら、先導的な入試を試みていくつもりです。

AC入試には8月入学の第Ⅱ期もあります。2002年度のAC入試第Ⅱ期(8月入学)で工学システム学類に入学した3名の学生全員が今年3月に早期卒業しました。しかし、AC入試第Ⅱ期の志願者は2003年度以降減る一方で、2005年度の合格者は0名でした。ところが、早稲田大学商学部で昨年からはじめた9月入学には多くの出願があったそうです。この違いは、早大が Semester制と併せて制度をシステム化していること、50名と若干名という募集人数の違い、試験方法の違いや広報などによると考えられます。

入試のスリム化

2002年9月にアドミッションセンターから「筑波大学における入学試験全体の整理・統合について」という報告書が提出されています。それには入試業務が過重であるためスリム化をすることが提言されており、それに従って2006年度から後期入試を廃止した教育組織もあります。また、同じ8月入学ということで2学期推薦入学とAC入試第Ⅱ期を纏めようという意見もあります。ただし、入試はそれ自身が受験生に対する

広報、少なくとも広報の機会、です。そういう観点からはどちらかの入試をなくすのではなく、入口と看板は両方とも残しつつ内部処理の共通化により業務をスリム化することが望ましいと考えています。

おわりに

紙面が尽きたので以下簡単に。選抜に携わる方々には、選抜は受験生(=本学のファン)だけに行うものであることを意識していただきたいと思います。志願させるまでが重要です。そのため、ACでは広報にも力を入れています。また、教員に入試業務へのインセンティブを持ってもらうことも必要であると考えています。そのために、受験料収入の一部(例えば3割)を当該学類に経費として配分されることを提案します。

(しらかわ ともり/知能機能システム)

*2006年度には両方の点数が上昇しました。